

県が今年度から始めた「屋上緑化」への補助事業に対し、専門家から「無駄遣い」と疑問の声があがっている。県は、ヒートアイランド現象の緩和や環境意識の醸成などの効果をあげるが、専門家は「効果は薄く、断熱材などで十分」と指摘。「費用対効果を考えないと、新市の公共工事のばらまきになりかねない」と忠告している。(伊藤裕)

■無駄遣い

「屋上緑化に補助金を出すのは無駄遣いだ」

7月29日、知事公館で開かれた「地球温暖化対策の検討に関する専門委員会」。ヒートアイランド研究の第一人者、日本工業大の成田健一教授(都市環境学)の発言に、メンバーから驚きの声が続出した。

県は今年度、県有施設の屋上や壁面などの緑化推進に本格的に着手。民間の駅や商業施設などの屋上・壁面緑化に対し、1件あたり最高500万円の補助金を出す事業の公募を始めたばかりだ。この日示した「ヒートアイランド対策ガイドライン」にも屋上緑化が盛り込まれていた。

良いが、ヒートアイランドや温暖化の対策として行政が推すのは、造園業者を喜ばせるだけ。環境に良いと無条件に進めるのではなく、50年、100年先を見据えた費

すというが、屋上に5センチ程度の断熱材があれば室内への流入熱はほとんど防げる②表面温度を下げる効果は「高反射率塗料」

屋上緑化

補助金に賛否



幾何学的な建物の中に、芝生などの屋上緑地が広がる(越谷市の埼玉県立大で)

で十分。屋上緑化による地上付近の気温低下効果は0.1〜0.2度に過ぎない③屋上緑化の典型である草地の場合、1平方

メートルあたりの二酸化炭素吸収量は、6〜7立方メートルの街路樹の250〜300分の1にすぎない。緑化空間づくりが目的なら

用対効果の議論をすべき」と手厳しい。

■費用対効果

モデルケースとされる埼玉県立大学のキャンパス(越谷市)には、図書館や実験施設の屋上約9300平方メートルに芝生などの

緑が広がる。学生たちがくつろぐだけでなく、ドラマの撮影にも使われ、イメージアップに貢献している。

年間の維持管理費は約200万円。決して安くはないが、情報・施設管理の担当課長、内田晴久さんは「断熱・遮熱効果以上に、校舎のどこからも緑が見え、昼休みに寝転がれ、環境教育や癒やしにつながっている」と効用を説く。

県は昨夏、2年前に屋上を緑化した埼玉会館(さいたま市)内の天井部分の温度を測定した。その結果、緑化部分と非緑化部分の温度差は、最高気温が35度以上の時で6.3〜8.1度、30度未満では0.6〜5.8度。気温が高くなるほど断熱・温度低減効果があることがわかった。

ただし、緑化には大きなコストが伴う。同会館の場合、470平方メートルの緑化に約800万円がかかった。強度や排水性を確保する工事が必要な建物もあるほか、植栽後は水やりや手入れが欠かせない。一般に断熱材の方が設置費も維持費も安く済む。

そのためか、県の補助事業への応募は現時点で6件にとどまるが、県環境部は「ヒートアイランドや温暖化対策の数字以上に、都市に『見える緑』を増やし、安らぎや緑の再生の大事さを意識してもらおう、数字に表れない効果が大きい」と強調する。費用対効果か、意識の醸成か――。屋上緑化に限らず、今後の環境政策を考える上でも議論は避けて通れない。

新たなばらまきだ

環境意識はぐくむ

